

## ウェルビーイングの実現を 目指す道徳教育

副会長 西野真由美



今後の教育政策の基本的な方針を策定した第四期教育振興基本計画が、本年六月一六日、閣議決定されました。

この計画のコンセプトは、すでに中央教育審議会答申で明示されていたように、「二〇四〇年以降の社会を見据えた持続可能な社会の創り手の育成」と「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」です。「持続可能な社会の創り手の育成」は、現行学習指導要領の前文に示された理念を継承しています。では、ウェルビーイングとは何を指しているのでしょうか。同計画では、ウェルビーイングとは、「身体的・精神的・社会的に良い状態にあること。短期的な幸福のみならず、生きがいや人生の意義などの将来にわたる持続的な幸福を含む概念」と説明されています。近年では、OECDの「Education 2030」プロジェクトが「個人と社会のウェルビーイング」を教育の目標に掲げたことで世界的に注目を集めました。

OECDは、二一世紀初頭に「キー・コンピテンシー」を提起した際、一連の資質・能力を「人生の成功 (a successful life)」へ導くものとして構想しています。経済的豊かさとは結び付けられがちな「成功」という見方は能力主義と批判されることもありましたが、しかし、二〇一〇年代以降、OECDの文書にはウェルビーイングの語が頻出するようになっていきます。どこかの時点で、人生を「成功」という目で捉えるのではなく、生きがいや生きる意味、さらには古代ギリシア思想における「幸福 (エウダイモニア)」、すなわち、「よく生きること」をも含意するような教育目標への転換があったように思います。

英語のウェルビーイングは、個人の幸福と社会の豊かさの両方を表す語です。個人とそれを取り巻く周りの世界が、相互に関わり合いながら、互いにとってよりよい状態を共に創造していく。そんな新しい時代にふさわしい目標だと見えるでしょう。OECDとは別の視点からウェルビーイングに注目してきたユネ

スコは、ウェルビーイングの意味は文化や地域によって多様であるという認識に立っています。基本計画が「日本社会に根差した」ウェルビーイングと示しているのも、グローバルな物差しだけでは測れない「幸福」の多様性が認識されているからでしょう。ウェルビーイングは、先の見えない不透明な時代と格闘してきた国際社会が見出した、共通の、そして同時に、多様でもある未来社会の姿であるといえるかもしれません。

これまで道徳教育において「幸せ」が主題となることはほとんどありませんでした。しかしすでに、道徳の特別教科化の審議の場では、道徳における学びを通して、「児童生徒が人生を幸せにより良く生きようとする意欲を育てる」ことが意識されていたのです（「道徳教育の充実に関する懇談会」報告）。現代のウェルビーイングが「よく生きること」を含む幸福概念であることからすれば、その実現はまさしく道徳教育の課題であると気が付きます。そして、その可能性を引き出すために、道徳教育自身も変革が求められています。子どもたちと社会のウェルビーイングに向き合うことが、新たな時代の道徳教育を創造する鍵となるといえるでしょう。

(国立教育政策研究所)

## 学会ノート

一九八〇年代以降の哲学界・思想界では、「道徳」と「倫理」、そして道徳教育は、大きな関心の的になっています。たとえば、イギリスの哲学者バーナード・ウィリアムズは、カントによる普遍化可能な「道徳」(定言命法)を批判し、自己の「インテグリティ」(統合性)に基づく「倫理」を説いています（『道徳的な運』勁草書房、二〇一九年）。「ケアの倫理」を提唱する教育哲学者ネル・ノディングズも、やはりカントを批判しつつ、自己の「倫理的理想」の大切さを説いています（『ケアリング』晃陽書房、一九九七年）。ウィリアムズやノディングズは「道徳」ではなく「倫理」を主張しますが、両者ともに人間が「自己の生き方」を追求することは大切だと考えています。

こうした世界の研究動向に目を向けるとき、道徳教育を「心の教育」と捉えがちな我が国の考え方をある程度相対化することができるかもしれません。これまで積み上げられてきた我が国の道徳教育のよさを継承しつつも、「当たり前」とされてきたことを改めて振り返り、世界的な視野から我が国の道徳教育を眺めてみることも時に重要だと考えています。

(高宮正貴)

## 文部科学省における道德教育の新しい動き

今号では、昨年12月に公表された「生徒指導提要」における道德教育についてお知らせします。「生徒指導提要」は、「小学校段階から高等学校段階までの生徒指導の理論・考え方や実際の指導方法等について、時代の変化に即して網羅的にまとめ、生徒指導の実践に際し教職員間や学校間で共通理解を図り、組織的・体系的な取組を進めることができるよう、生徒指導に関する学校・教職員向けの基本書」として、文部科学省が平成22年に初めて作成し、今回12年ぶりの改訂となります。

### 生徒指導の基礎

今回の改訂では、次のように生徒指導の定義と目的が明記されました。

#### 〈生徒指導の定義〉

生徒指導とは、児童生徒が、社会の中で自分らしく生きることができ存在へと、自発的・主体的に成長や発達する過程を支える教育活動のことである。なお、生徒指導上の課題に対応するために、必要に応じて指導や援助を行う。

#### 〈生徒指導の目的〉

生徒指導は、児童生徒一人一人の個性の発見とよさや可能性の伸長と社会的資質・能力の発達を支えると同時に、自己の幸福追求と社会に受け入れられる自己実現を支えることを目的とする。

## 道德科を要とした道德教育における生徒指導

道德教育と生徒指導の関係について、道德教育がその目標に示されているように、道德性の育成を直接的なねらいとしている点を除けば、道德教育と生徒指導はいずれも「児童生徒の人格のよりよい発達を目指すもの」であり、「学校の教育活動全体を通じて行う」という点で共通であるとしています。その上で、「道德教育において児童生徒の道德性が養われることで、やがて児童生徒の日常生活における道德的実践がより確かなものとなり、ひいては自己実現にもつながる」とし、生徒指導の目指す「社会の中で自分らしく生きることができ存在へと児童生徒が自発的・主体的に成長や発達」につながるなど、道德教育と生徒指導は密接な関係にあるとしています。

道德科の授業では、その特質を踏まえ「生徒指導上の様々な問題に児童生徒が主体的に対処できる実効性ある力の基盤となる道德性を身に付ける」ことが求められているとしています。その上で、道德科の授業に資する生徒指導、生徒指導の充実に資する道德科の授業についての説明がなされ、道德科の授業と生徒指導が相互補完関係にあるとしています。

「生徒指導提要」については、文部科学省のウェブページからPDFファイルとしてダウンロード可能ですので、ぜひご覧ください。

(飯塚 秀彦)

## 本部からのお知らせ 次世代育成成型研究プロジェクト 「次世代」育成委員会

二〇二一年五月に設置された次世代育成WGは三二項目の学会改革の提案を行いました。そのうち早速に実現すべきこととして「テーマ別研究課題を年間に数件設定し、それぞれに研究グループを組織して、数年間の年限を設けて検討するプロジェクトを立ち上げることを示しました。この点について、特別委員会として設置された「次世代」育成委員会において検討を行い、本年六月の理事会で「日本道德教育学会次世代育成成型研究プロジェクト内規」が承認されました。以下では、その概要のみを紹介させていただきます。

次世代育成成型研究プロジェクト(PJ)は「道德教育の研究及び実践に係る課題に取り組み過程を通じて、学会員相互の交流・研鑽及び次世代の育成」またPJを進めることで「学会の研究活動の活性化を促し、ひいては道德教育の研究と実践全体の発展に貢献すること」を目指しています。特に前者の目的のためには会員の積極的・主体的な参加は欠かせません。そのため、PJに参加する会員(PJメンバー)には「研究会で発表を行うなど主体的な参加」を要件とさせていただきました。ただ、「次世代」という言葉を冠していることから、年齢や経験等によって制限があ

るのではないかとというお問い合わせをいただいておりますが、そのような制限はございません。「次世代」を育成するにあたっては、多様な世代や経験等を有する会員相互の交流が欠かせません。ですから、積極的・主体的に参加いただける会員であればどなたでも大歓迎です。

PJメンバーの主体的な参加による研究会を積み重ねていただき、その成果を一年に一度以上学会大会のラウンドテーブルないしは自由研究発表の場で報告いただくこと、またPJ終了時に学会ホームページに掲載する報告書を作成・提出していただくことを願っています。

今期のテーマは「道德科の指導法」と「道德科の評価」とさせていただきます。道徳科が教科となつて以降、最も注目されてきた研究テーマであり、多様な実践や研究が公にされてきました。それらの先行研究を踏まえつつ、PJメンバー間で検討していただき、新しい知見が見出されるPJとなることを期待されています。テーマごとに理事が担当しますので、具体的な進め方は理事を中心に相談していただき、活発に活動いただければ幸いです。

今後、今期の実施状況を踏まえつつ、PJの在り方を見直していく予定です。ので、会員のみなさまには、PJへの積極的な参加とともに、在り方についても御意見をいただきますようお願い申し上げます。 (委員長 走井洋一)

## 2023(令和5)年度春季(第101回・新潟青陵大学)大会報告

第一〇一回(二〇二三年度春季)大会は、二〇二三(令和五)年七月一日(土)・二日(日)の二日間、新潟青陵大学を主会場に、「『令和の日本型学校教育』を志向した道徳科の授業づくり」をテーマとして開催致しました。

本大会の企画段階においては、COVID-19の感染状況も不透明な時期ではありませんでしたが、前回の第一〇〇回記念大会に続き、無事、対面で実施することができました。これも永田会長をはじめ、貝塚事務局長、毛内広報企画運営委員長といった方々からのお力添えがあったとのことと感謝申し上げます。また、本大会には文部科学省、新潟県教育委員会、新潟市教育委員会、新潟県・新潟市小学校教育研究会、新潟県中学校教育研究会、全国小学校道徳教育研究会、全日本中学校道徳教育研究会、全国公民科・社会科教育研究会から後援を、九つの出版社及び財団から協賛をいただきました。この場をお借りしまして厚く御礼申し上げます。

さて、本大会には全国から二六一名の申し込みをいただきました。多数の方からご参加いただき、改めて感謝申し上げます。以下、本大会の概要をご報告させていただきます。

### 公開授業・授業協議会

本大会では、大会第一日目の午前時間帯において、新潟市立新潟小学校と新潟市立寄居中学校を会場として、新潟小学校では二クラス(授業者・乙川朱音教諭・剣仁美教諭)で、寄居中学校では三クラス(授業者・櫻庭元教諭・吉村良平教諭・長谷川明広教諭)で公開授業と授業協議会を実施しました。新潟小学校・寄居中学校ともに約百名の参加者があり、実際の授業に基づきながら活発な協議が行われました。

### 基調提案・ラウンドテーブル

大会第一日目の午後は、開会行事に続き、基調提案では、本学会の名譽会長でもある押谷由夫先生から、「令和の日本型学校教育における道徳教育と



押谷由夫先生による基調提案

『特別の教科道徳』の位置づけ・役割・展開―日本型学校教育の根幹に着目して―というテーマでお話をいただきました。多くの方に埋め尽くされた五三〇一大講義室には、押谷先生の講演を真剣な表情で拝聴する姿が見受けられました。

基調提案に続くプログラムは、ラウンドテーブルでした。このラウンドテーブルは、第一〇〇回記念大会で初めて企画されたものです。本大会でもこの成果を引き継ぎつつ企画したものでしたが、前回と同数の九つの部会を構成することができました。それぞれの部会において多くの会員から企画者や報告者、指定討論者としてご発表頂くとともに、自由研究発表とは異なる雰囲気の中、意見交換がなされました。

### 情報交換会

大会第一日目の夜は、ホテルオークラ新潟を会場として情報交換会を実施しました。情報交換会には、当初の想定を超える、一五五名の皆様からご参加いただき、盛り上がった会となりました。



情報交換会の様子

### 自由研究発表・シンポジウム・閉会行事

大会第二日目の午前は、十一の分科会において合計五十四件の自由研究発表が行われ、活発な議論が展開されました。

大会第二日目の午後は、大会テーマでもある「『令和の日本型学校教育』を志向した道徳科の授業づくり」をテーマとして、コーディネーターの貝塚茂樹先生(武蔵野大学)の趣旨説明と進行のもと、田沼茂紀先生(國學院大学)・鈴木賢一先生(愛知県弥富市立十四山東部小学校)・佐久間奈々子先生(新潟市立総合教育センター)・長谷川元洋先生(金城学院大学)の四名の提案者によるご提案の後、フロアからの質疑も交えて活発な議論が行われました。

シンポジウム後の閉会行事では、次の第一〇二回大会運営委員長の椋木香子先生(宮崎大学)のご挨拶、本学会副会長の西野真由美先生による閉会のご挨拶をいただき、本大会を盛会裏に終えることができました。



最後になりますが、学会理事会はもとより、本大会の運営に当たって多大なご尽力をいただきました大会運営委員の先生方と本学関係者に対し、この場を借りて感謝と御礼を申し上げます。(第一〇一回大会運営委員長 中野啓明)

**道德教育研究・実践の探訪 全国大会校編**  
**全国小学校道德教育研究会・全日本中学校道德教育研究会**

**函館市立鍛神小学校の紹介**

全小道研会長 小西祐一

今年度、第59回全国小学校道德教育研究大会北海道函館大会の会場校は、函館市立鍛神小学校です。同校は、児童数三二八名、創立一四二二年の歴史をもつ学校で五稜郭公園から車で約5分の所に位置しています。『みんな元気! あったか鍛神』をキャッチフレーズに、「自立」「共生」「創造」を学校経営方針の柱として、重点教育目標「みがきあいみんな輝くかやげの子」「かやげ」とは、「か」・かんがえる子、「や」・やさしい子、「げ」・げんきな子の実現に向けて取り組んでいます。

先日、7月31日に、全小道研会長、同顧問代表、同副会長とで鍛神小学校を訪問し、御挨拶方々、全国大会に向けた進捗状況をお聞きしました。函館大会の大会主題『主体的に学び合う児童・生徒の育成』と Well-being の実現を目指した道德教育の実践』に向けて鍛神小学校では、三上泰司校長のリーダーシップのもと、他者との対話を通して、学びを深める授業づくり、道德教育での実践を通して、研究主題として精力的に研究を進めるなど、全国大会に向けて着々と準備が進められています。また、函館市は、平成8年度に全国大会を経験しており、永井貴之実行委員長をはじめ、そ

の時に若手として活躍したメンバーが今回の大会を推進しています。

当日は、鍛神

小学校の教員と、函館市の道德教育を推進している市内の教員に

よる公開授業が行われるほか、課題別分科会では、全国の実践が紹介されます。ぜひ、多くの皆様にご参加いただきますよう、どうぞよろしくお願いたします。



**函館市立亀田中学校の紹介**

全中道研会長 月田行俊

**一 学校の概要**

函館市立亀田中学校は、生徒四八八名16学級(支援学級2含む)で、市内有数の商業地区であり、交通の要衝にあります。全道規模の大会は何度か開催されましたが、全国大会は平成28年の音楽科大会に続き、75年の歴史で二度目となります。

**二 全国大会函館大会に向けた取組**

コロナ禍後の令和時代の研究大会の在り方を模索しながら、働き方改革の波を止めぬことも踏まえ、新たな視点で実践を進めていただいています。

**◆ 持続可能な授業づくりに向けて**

(一) 学校ぐるみの組織的授業づくり  
 専科免許のない道德科授業に苦手意識をもつ先生も少なくない中、道德教育推進教師を要として授業展開のコツを共有しながら進めています。同じ教材を繰り返し実践できるローテーション道德科によって少しずつではあります、全員が指導スキルの向上を図りながら進めています。大会当日は本校職員による全学級公開を計画していただいています。



(二) 授業づくりの視点  
 「あすを生きる」の教材を生かすために、『中心発問の工夫』と『ICTの効果的活用』の二点に絞って実践を重ねています。7月には市教委とタイアップし、前文科省調査官の浅見哲也氏をお招きし、3名が授業公開を行い、市内会員及び本校職員で研修を実施しました。



**◆ 大会参加者全員が当事者として**

従来の「授業者」対「参加者」による討議の在り方を見直し、全参加者が「考え議論する」対話の場を工夫するといった設定で取り組む予定です。

**道德教育研究・実践の探訪 研究室編**  
 四天王寺大学 杉中康平

**1. 道德科における「深い学び」とは?**

道德科における「深い学び」については、道德科の目標に示されている道德科の(1)学習と(2)目的の2つの側面から考えると分かりやすい。これは、言い換えると、(1)どのように学ぶのか?と、(2)その結果、どのような資質・能力を育てたいのか?の2つの側面から考えるということである。

**(一) 道德科の「学習」の側面から**

道德科の目標では、道德科においてどのような学習がなされるべきかが具体的に示されている。つまり、「道德的価値の自覚を深める」ことを通して、自己の(人間としての)生き方についての考えを深めることが、道德科における「深い学び」であるといえる。

**(二) 道德科の「目的」の側面から**

また、道德科の目標では、人間としてよりよく生きようとする人格の特性である「道德的な判断力、心情、実践意欲や態度」といった「道德性を養う」ことが、道德科の目的であると示されている。だとするならば、道德科における学びは、子どもたちの「道德性」育成に寄与する学びでなければならぬはずである。

## 2. 「深い学び」を実現する道徳科の授業とは？

以下に提案する「子どもたちの対話的な交流を中心として深める授業」(「動き」のある道徳科授業)は、まさに、この道徳科における「深い学び」を実現するために備えておかなければならない2つの要件である「道徳的価値の自覚」と「道徳性の育成」を共に重視し、追求した授業であると考ええる。

## 3. 提案！「動き」のある道徳科授業

私は、現在、札幌市立あやめ野中学校の磯部一雄教諭が主宰する「動き」のある道徳科授業研究会(「動き研」と連携し、児童生徒の「深い学び」を実現する道徳科授業を共同研究している。

磯部氏が実践する「動き」のある道徳科授業は、次の2つの「動き」でできている。

### ○「動きⅠ」：「場面再現」する「動き」

教材上の設定に沿って、「音」、登場人物の「せりふ」、表情、仕草、行動」などをペアや学級全体で、「役割演技」や「動作化」等の手法を用いて場面を再現することで、登場人物への「自我関与」が深まり、一読しただけではなかなか理解できない登場人物の心情や生きざまを体験し、理解することが容易になる。

### ○「動きⅡ」：ホワイトボード&

マグネットによる対話・交流の「動き」 全員のホワイトボードを黒板に掲示し、共感できる意見には「緑のマ

グネット」を、さらに考えを聞きたい意見には「青のマグネット」を置く。置かれたマグネットを基に、対話・交流を進める。これらの活動を通して、他の様々な意見や考えに触れ、学び合うという「相互評価」の活動を行うことで、自分の意見と比較したり、自分の意見をもう一度見詰め直したりという、「自己評価」の活動も行うことになる。

## 4. 「深い学び」はどのように実現するか

この「動き」のある道徳科授業は、教師が自らの発問で主導するのではなく、児童生徒が互いに対話・交流し、学び合うのをファシリテートする立場で、進めていくことについて、児童生徒が「生き方」についての考えを深めていくことをサポートしていくことをめざして、行われるものである。

私は、児童生徒の道徳性を育成するためには、児童生徒の「自己評価力」(「自己指導能力」)の育成が不可欠であると考ええる。

「動きⅠ」の「場面再現」によってしっかりと「自我関与」し、主体的に道徳的課題をとらえたうえで、「動きⅡ」の学級の仲間たちとの「相互評価」を伴う「対話」を通して、「自己評価力」を高めることが可能になるのである。

さらに、この「動き」のある道徳科授業による豊かな学びを検証していきたい。

## 私の実践

### 中学校における「体験的な学習」の充実を目指して

弘前大学教育学部附属中学校 佐々木篤史

十年ほど前からご縁があり、毛内嘉威先生と直接関わらせていただくようになってから道徳の授業づくりを本格的に学ぶようになりました。毛内先生とのつながりで、数多くの先生方の実践や考えにふれる機会をいただきました。そこから、今までの自分自身の実践が浅いものであったことに気づき、実践の幅を広げ、深いものに変わっていくことになりました。

その中でも特に、早川裕隆先生の「役割演技」の授業を見る機会をいただいたから、「体験的な学習」をいろいろと取り入れながら実践を積み重ねているところだ。自分の問題意識として、生徒の教材との出会い方が、一人称・三人称というよりも非人称であり、自分には関係のない世界で起こっているという感覚であることでした。発問や問い返しによって、自分自身との関わりで考えられるようになる生徒もいますが、いつまでも自分の世界から抜け出せない生徒もいると感じていました。

「役割演技」「など」の指導法を用いることで、教材の世界を擬似的に体験することで、こういったところを超えていける可能性を感じたわけです。あえて「など」とつけてみましたが、「役割演技」「動作化」以外にも効果的と思われる指導法はあります。

私が授業によく取り入れているのは、「ホットシーティング」というドラマ

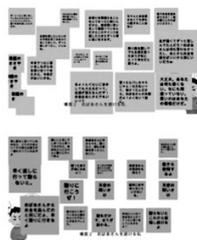
教育の手法です。教室前方に置いたイスに座った人が、登場人物になりきって、インタビュアーに回答するというものです。質問は教師だけでなく、観ている側の生徒たちもできます。生徒が質問をすることで、単なるお客さんになるのではなく、生徒の参加にもつながります。この際に、ICTを活用することで、声が出しづらい生徒も意見を出すことができるので、授業への参加感が高まります。

公開授業研究会で行った「足袋の季節」の授業では、釣り銭をごまかしてしまい、無意識におばあさんを避けてしまっている「私」になりきってもらい弱さと向き合うことについて考えました。生徒からはGoogleジャムボードを使って、

「そのまま知らないふりをすればいい」といった悪魔のささやきと、「正直に言った方がいい」といった天使のよびかけを天使か悪魔



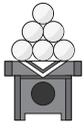
悪魔：大丈夫 あなたは何も悪くないよ何も間違っていない  
悪いのはあなたの環境だけだから



になって入力してもらい、「私」に対してささやきとよびかけを投げかけ、「私」はそれに応答していきます。はじめのうちは自分と「私」の接点は少なかつたのですが、投げかけられ、応答していくうちに、接点ができてきて、自分の問題として考える様子が見られました。観ている側は、応答の様子を見て聞いて考えたことについてペアトークをしていきます。接点ができている中で表情も変わってくるので、その発言や態度から、自分との違いなどについて考えたりすることで、考えを広げたり深めたりする様子が見られました。

最近では、移動の制限もなくなり、研修講師で呼んでいただく機会も増えました。毛内先生をはじめとして、たくさんの方から学ばせていただいた経験を、他の先生方に還元する立ち位置にきたのかなと考えています。今回紹介したような授業を、飛び込みで実践させていただいたり、自校や校外での教員研修の場で先生方にやってもらったり、大学生への講義や教育実習の事前指導で実践したりさせてみると、「体験的な学習」のよさを感じてもらい、少しでもそういった実践が増えればなと思って取り組んでいるところです。

ゆくゆくは論文にまとめるといいう取り組みに昇華していきたいと思えます。



### 『人倫の形而上学の基礎づけ』 『実践理性批判』

カント

一八世紀ドイツの哲学者カントの道徳哲学は、個人の理性と道徳性に焦点を当て、人間の尊厳を重んじる点にその特徴があります。その中でも、『人倫の形而上学の基礎づけ』（一七八五年）と『実践理性批判』（一七八八年）は、道徳教育のあり方を考える上での哲学的な基盤を提供し続けてきました。

二つの著作は、普遍的な道徳原理や個人の自律を強調し、他者との関わりや自己の成長を通じて、個人が善を実現し、道徳的な人間性を育むための指針を明らかにしています。

まず『人倫の形而上学の基礎づけ』の中で、カントは道徳的行為の基本となる原則を示しています。これは一般に「定言命法」として知られており、個人が普遍的な道徳法則に従って行為すべきであることを主張します。この法則は、自分の行為が普遍的な法則として成り立つように行うべき」と命じるものがあり、個人が自己の欲望や感情に囚われることなく、他者との関係において、普遍的な法則を尊重する道徳的な判断を行うことを求めています。こうした道徳的な要求を突き付けてくるものが実践理性であり、そうした実践理性の要求に応じて行為することができるところに、人間の尊厳があるとカントは考えたのです。

### 道徳教育を支えてきた名著 3

そして『実践理性批判』では、実践理性の概念そのものが考察の対象となり、個人が自己の意志を理性的に導き、善を追求する能力の重要性が強調されています。この著作では、「目的の国」という概念が導入され、道徳的行為は、個人の幸福のための手段ではなく、それ自体が最終的な目的であり、人間が互いに相手を目的として尊重する社会が道徳的理想として描かれています。

個人が自己の意志を理性的に導き、善を追求することによって、自身の成長と社会の善の実現が可能になるのです。このように、『実践理性批判』は、個人が道徳的な原則に基づいて行為し、自己の成長と社会への貢献を追求する能力を育むための指針を示していると言えます。

カントの道徳哲学は、道徳教育に対する思想的な基盤として、大きな影響を与える要素を含んでいます。

まず、カントは普遍的な道徳法則に基づく行為の重要性を強調しています。定言命法によれば、個人の行為は普遍的な法則に適合しなければならず、個人の欲望や感情に左右されることなく、普遍的な価値を持つ行為を実践することが求められます。この考え方は、道徳教育において、生徒個人が自己の行為を道徳的な原則に従って選択する意識を養う助けとなるでしょう。

次に、カントは自律的な行為の重要

性について論じています。彼は、個人が自己の理性に基づいて行為し、自己を律することによって道徳的な成長を遂げることができると述べています。この自己の支配と自己規律は、道徳教育において、個人が自己制御と責任感を養い、自己の行動に対する意識的な選択を行う力を育むのに役立ちます。

また、カントは、他者の尊厳を重んじることも論じています。定言命法の一つのあり方として、彼は他者を単なる手段としてではなく、目的そのものとして尊重すべきだと述べているのです。この概念は道徳教育において、他者への共感や思いやりを養うとともに、社会の調和や共生を推進することにもつながるでしょう。

さらに、カントの道徳哲学は個人の自己実現と社会の発展についても触れています。善への意志に基づく道徳的行為は、個人の成長と他者への貢献を促進し、社会全体の道徳的な発展を支える要素となります。このような視点からは、道徳教育において、生徒が自らの才能と価値を最大限に発揮する方法を学びながら、他者と協力し社会に貢献する姿勢を培うことに役立ちます。

総合すると、カントの道徳哲学は道徳教育において、普遍的な道徳法則への従属、自律的な行為、他者の尊重、個人の自己実現と社会の調和など、重要な影響を与えています。これらの要素は、個人が道徳的な判断力を養い、個人としての成長と社会の発展を促進するための指針となるでしょう。

(上智大学 鈴木宏)

## シリーズ日本の道德教育への提言

道德教育を通じて道德性の育成を  
「体験活動を基盤に自己を見つめる」

植田和也

これからの道德教育を考える際、道徳科の授業改善や充実とともに、全教育活動による道德教育を通じて道德性の育成を図ることが重要である。その際、体験活動や体験的な学びを道徳科にどう生かすか、道徳科を見つめ直す一つの視点として検討し、さらに教育課程全体を通して道德性の育成をどのように図るのが肝要であると考えられる。

体験活動については、平成10、20年度の学習指導要領で、「体験活動等を生かした心に響く道德教育の実施」「豊かな体験を通して内面に根ざした道德性の育成を図る」など、明示されてきた通りである。しかし、体験活動での学びがどの程度生かされているのか、道德性の育成に資する体験であったのかは定かでない点が多くないだろうか。

本会報74号において、「体験活動を通して考えたことや感じたことを道徳科で振り返り、思いを共有すること」(棕木氏)や、76号の「広い視野をもち、道德授業以外の教育活動へ目を向ける必要がある(門脇氏)」といった指摘には大いに共感できる。そのような指摘とも関連する香川大学教育学部附属高松小・中学校の体験活動を基盤とした自己の成長や課題を見つめる取組や教育課程の編成について紹介したい。

附属高松小学校では令和4年度より、

研究開発学校の指定を受け、「個の生活知を豊かにする新領域「経験」と、

体験を価値の創造につなぐ「じぶん」の時間を創設し、経験から新たな知や価値をつくる教育課程に関する研究開発」を研究課題として実践を試みている。このような教育課程の編成は、長年の縦割り活動を核に体験的な学びの継続が基盤にある。令和3年度まで、道徳、特別活動、総合的な学習の時間を統合した「創造活動」を設定し、縦割りで体験的に学ぶ活動等も取り入れて、体験での学びによる道德的な課題に対する話し合いや自身の成長を見つめる時間を設けていた。それ以前には、道徳と特別活動を統合し「生き方、在り方についての認識と行動が統一されて、健全な価値観を創造し、実践していくふれあい学習」が設定されていた。また附属高松中学校では、「人間道徳」として、道徳科と総合的な学習の時間の性質を併せもつ実践研究を展開している。「人間道徳」は、協働的に学年集団で学ぶプロジェクト型の「協働の学び」と、異学年集団や大学生等から助言を参考に個人課題を探究する「個の学び」からなる。令和5年度から研究開発学校として、人間道徳を「MIRAI」として、単元の節目や活動の中で自己の生き方・在り方を問い直し、調整する時間「省察の時間」を位置付けて取り組んでいる。両校の取組は、体験を基盤として自己を見つめる挑戦的な取組であり、道徳の新たな枠組みも含めて注目されている。

(香川大学)

## 会員の声(私と学会)

## 私の研究心に火をつける学会

星美由紀

第一〇一回新潟大会のラウンドテーブルでは報告者を務めさせていただきました。会の後、以前にも発表を聴いてくださったという北海道の先生からお声がけいただきました。中学校の教員である自分が、学会の場で発表させていただく価値はあるのか、実践報告に終わり研究の域に達していないのではないかと、自分はどう進みたいのか、等々、学会での発表を終える度に打ちのめされる自分にとって、そのように声をかけていただくなど、予想外であり、勇気をいただきました。その先生がまだ大学院生だった令和元年に初めて私の発表を聴いてくださったとのこと……。ご縁と出会いに感謝した瞬間でした。また、過去に、評価について発表した際に、資料を送ってほしいとご依頼くださった校長先生と新潟の地で再会することもできました。

学部でも院でも、道德教育を専門的に学んでこなかった私が、日本道德教育学会の大会に初めて参加したのは、平成二七年東京学芸大でのことでした。学会の場で想像以上に多くの中小高校の教員が、実践研究を発表されているのが衝撃的でした。平成三〇年の文京学院大学での大会では、学年ローテーションで道德の取り組みについて、初めて学会発表に挑戦し、様々な指導をいただきました。学会の発表に手を挙げ、当日まで準備を進めることで

自身の実践をふり振り返り、いただいたご批評・ご指導を基に実践を客観視し、次の授業実践をデザインする。道徳の授業が好きで楽しい、とただ闇雲に授業実践をしていた自分にとって、学会との出会いは大きな転機となりました。

とりわけ武蔵野大学での一〇〇回記念大会で「次世代からの提言」として登壇させていただいたことは、得がたい経験でした。

【The great teacher inspires】「偉大な教師は心に火をつける」というウィリアム・アーサー・ウォードの言葉のように、日本道德教育学会の存在そのものが私の研究心に火をつけてくれます。拙い発表で恥ずかしい思いをしたことも幾度となくありました。「子どものためにどれだけ汗や恥や時間をかけるか。そこに『愛』が表われる」。落ち込む私に、そんな言葉をかけてくださる会員の先生もいらっしゃいました。たった一時間の研究授業のため、関西から参観に駆けつけてくださった会員の先生もいらっしゃいました。ゼミ生でもない私に、親身になって研究の相談に乗ってくださる会員の先生が多くおられ、ただただ感謝です。内容項目研究、当事者性研究、ケアリング論、キャリア学習と道徳科：学びたいことが山積です。道徳科が依って立つ学問研究の視点も大事にしながら授業実践を積み重ねたいと思います。全ては目の前の子どもたちのために。

(郡山市立郡山第三中学校)

## 論文執筆のための講座(第3回)

## 「実践研究論文執筆のポイント」

木下 美紀

## 実践研究論文とは何か

実践研究論文は、「教育を科学する営み」だと言えるでしょう。一つの人格をもった子どもを対象とし、その変容を、認知的側面・情意的側面・行為的側面等の領域から見えていく難しさは、特別なものです。その変容には多様な要素が含まれ、仮説・検証が容易ではありません。しかし、それを克服し、因果関係を立証していく、つまり、困難なものを科学し、客観性をもたせていくことが望まれます。主に情意的な側面の変容を検証する道德教育における実践研究論文は、この客観性をどう担保するかが、よりよい論文を執筆する鍵を握ると言えます。

## 実践研究論文を書く意義

まず、実践研究論文を書く意義ですが、三つあると考えます。一つは自分の実践を意味付け・価値付けることです。教師の手立ての何がよかったのか、児童・生徒の姿から分析、考察し、新たな知見を得ることです。二つは、自己内省・自己内改革を図ることです。書くことは、論理性、客観性が要求される創造的な営みです。論文を書くことで、新たな実践へと発展させることができます。三つは、理論と実践の往還から新たな理論構築を図ることです。そして、何よりも、自身の教育の営みを永久的に残すこと、これが最大の

の魅力でしょう。言葉は、瞬時に消えてしまいます。文章化することで、素晴らしい実践を世に残すことができず。論文を読むとその当時の授業場面が浮かんできます。実践研究論文は、実践のタイムカプセルと言えるでしょう。

## よい論文とは？

よい論文とはどんな論文でしょうか。査読の内規がそれを示しています。①獨創性・斬新さ、②有用性、③信頼性、理論構成や論理展開の妥当性、④先行研究を踏まえ、表現が的確・適切であり、わかりやすいこと。それに加えて、⑤特に「実践研究論文」においては、実践内容の特徴がよく分かるように記述されていること。この五つめは、実践研究論文だけにある項目です。これこそ、実践研究論文の必須条件と言えます。読んでいて、授業像が浮かぶか、教師の手立てに対して、児童・生徒がどのような反応をしたのか、みずみずしい実践の様子が浮かぶこと、これが重要なポイントです。

## よりよい論文にするために

よりよい論文にするために、次の三つのことを心掛けたいです。一つは、仮説、検証型への転換です。「教育を科学する」ということです。データ(児童・生徒の反応、ワークシート、ICTを活用したものなど)をもとに検証していくことで、信頼性が増します。仮説を立てて実証し、望ましい反応が得られたときは、何が効果を発したのか、また、想定した反応が得られなかったときは、何が要因なのか、それを克

服する手立てを考えることが必要になります。成果と課題を導き出すときは、仮説検証型の演繹的な方法と、さまざまな方法をもとにしたものから規則性を見いだす帰納的な方法があります。二つは、実践の特徴を出すことです。どこが自分の実践の強みか、手立ての有効性を児童・生徒の姿から分析、考察し、そのよさを伝えることです。一実践ではなく、二つ以上の実践を入れて、実践内容の特徴がよく分かるようにしたいところです。三つは、実践と理論を結びつけ、汎用性と新たな知見を得ることです。

最後に、「論理性」について、次のことをチェックしてみてください。

□ 仮説を中軸として一貫した論旨を展開しているか。

□ 論述の根拠が明らかで、条件も落ちがないか。

□ 問題提起から結論までの叙述に矛盾がないか。

客観性・論述性が増して、アカデミックに追求していければ、研究論文としての提出も可能になります。

以上、実践研究論文のすすめ方の概観を述べてきましたが、よりよい論文を書く最大のポイントは、「読者」に実践のよさ、魅力が明確に伝わり、理解され、「やってみたい実践」だと思われるか、ではないでしょうか。そのために、日々子どもと共に創るみずみずしい実践をめざしたいです。

(福津市立勝浦小学校)

## 書籍のご案内

日本道德教育学会が刊行した、『新道德教育全集』(全5巻)です。

学会員は特別価格となります。詳しくは、左の二次元コードからご覧ください。



## 編集後記

暑い夏でした。国連のグテーレス事務総長は「地球温暖化の時代は終わり、地球沸騰化の時代が到来した。」とし、気候変動対策のための行動を呼び掛けました。喉元過ぎれば、「暑さ」忘れの私たちです。生き方についての考えを深める道德教育や道徳科からのアプローチが重要になっているのではないのでしょうか。

第78号をお届けします。そして、宮崎での再会を楽しみにしています。

(広報委員)